

して飛雨となり、濺沫潤に満ち兼ねて内部の孔竅に浸入し、内外交攻撃して遂に彼の

於巖奇哉鬼橋奇、鬼耶神耶將化兒海内異觀歸一掃、天台石梁亦徒爲吟、客夜投帝釋窟、大巖壓夢、夢纒支、曉霧攀入急、峽際怪障危、巒貫翠圍、石門重開雲吞吐、波角牽掣倒垂枝、忽看大壑中、否塞飛來長流何處之、寧知空際通山脈、百丈橫跨千尋谿、萬古不撓穹隆勢、雲根天矯逸蟠螭、上生老樹爲欄楯、牛馬來往似坦夷、下如大月生溟渤、水蕩仙氛相爭馳、縱有霖潦漂山至、洞然流去屹不移、疑他老蚪奔駭觸山死、鱗甲化石不絕離、又疑天半長虹飲谷夕、靈淑固結凝不腐、不然太古架橋梁、始眞宰教民運巧思、萍梗嘗搜東方勝、金洞庚申屈指推、不知絕奇在、目睫一條、壓倒萬嶽、巖寄語天下烟霞客、公論不是我言私、不攀晃嶽勿談美、不渡鬼橋勿說奇。

坂谷期廬

てよ

備後國奴可郡帝釋村に在り

備後國福山町より五里二十町、若くは尾道町より六里十一町、廣田郡府中村に出で、村より北行し、二里、同郡木野山村に到り、更に



岩籠葛山名様

(在=(行南)側左ノ口入社神山名様 岩折九階雅) 大氣、風、水、溪、雨、霧、氷、雪、火の山岩を蝕して成す (シマス照参ト部ノ山名様頁一十七第)

火山岩と侵蝕の一部分のスケッチ
 小野嶽の北流に於ける侵蝕の激しき部分のスケッチ
 小野嶽の北流に於ける侵蝕の激しき部分のスケッチ



火山岩に於ける侵蝕

の如きを刻出し、既にして奔馬の如く下り、到る處脆弱なる地皮を剝磨し來る其の

(一) 火山岩に於ける侵蝕

の如き、流水は先づ岩の表面を剝磨し、且つ其の多孔なるに乗じ、頻りに内部に入りて、攻撃し、竟に彼の箱根、日光、鹽原の勝を造くり、榛名山中の奇巖（葛籠岩等）を彫鏤し、其の雄快なるは到底支那人、英吉利人等の其國に在りて目睹する能はざる所、特に豪放奇詭なるは、

耶馬溪記

歲戊寅、遊鎮西、過海、南望彦山於雲際、已覺其有異矣、既經二肥薩、隅、還寓

日本には流水の侵蝕激烈なる事

帝釋ノ鬼橋

一名神橋、又た雄橋、所謂雌橋は雄橋より帝釋川の下の流一里に在り、鬼橋、「神橋」の俗稱あれども、敢て鬼神の之れと取て、帝釋川上流の激なる水力は、峭然たる岩壁を浸蝕して、此の石橋を刻出す。三里二町、甲奴郡上下村に到り、更に三里三十一町、同郡細草村に到り、更に二里八町、三上郡庄原村に到りて東折し、更に四里三町、奴可郡西城村に到りて南折し、更に三里十二町、免に帝釋村に到る。又た伯耆國米子町より東南五里、日野郡二部村に出で、村より四里行し、更に三里、同郡黒坂村に到り、更に三里三町、同郡慶村に到り、更に三里十七町、同郡多里村に到り、更に四里四町、備後國奴可郡小奴可村に到り、更に二里二十五町、同郡西城村に到る。以下前出する。帝釋川の東に、大滝あり、一里ノ河原に、俗稱す。帝釋川より帝釋川に流ひ、山徑を變づる、凡半里、鬼橋の上に出づ。林樹鬱蒼、些も橋上に在ると、覺ゆる、迂回して下り、即ち山に出づ。幅七間餘、厚サ五間餘、長サ三十間餘の彎曲せる、一大石橋、山より山に架し、帝釋川を跨り、水面上より高サ七間餘に懸ると看る。

火山岩の水蝕
と寫す所、筆
々生動、眞に
逼る、是れ山
陽にあらすん
ば能はざるも
の、山陽又た
句あり、傑出
奇巖勢接連。
挿天碧筍削春
煙。一峰別起
形相類。山脈
知如竹走纏一
と、是れ亦た
善く火山岩の
水蝕と寫す

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百六十二

豊後隈邑臘月五日。入豊前。遇一水北來。蓋發源彦山者。沿焉而東數十里。昏黑覺左右峰巒皆非凡。山溪相迫處。鑿山腹爲道。又穿廬取明。余買炬以入。廬窺見月在溪水。朗然宿民家。翌大霧待。發復沿溪東。愈東愈奇。群峰夾水攢竦。如春筍矗出。有土載石者。石挾土者。全石者。全石破裂成洞。尤者兩石相闕。其一欲仆者。石數層累成夏雲狀者。而樹自石罅橫生。縱生倒生而上。指叢生蔽石。如與石爭勢而欲勝之。石又自樹中奮躍而出。而石陰皆苔紫綠相間。或沒石半面。或沒全身。又如援樹攻石者。大抵峰勢石皴如畫。巨刻意圖。時窮冬。多老木葉脫。槎牙瘦古。皆倪黃筆法。而苔枯蹙蒼渴者。王叔明也。古人筆墨不吾欺也。至梯阪憩孤店。店面石壁數丈。飛泉懸焉。仰則更有高峯。不知其幾十丈。余急釋所佩酒瓢。命袴之。窺突蕭然。會一獵師新獲豪豬。割而煮之。肪脆如水。連引數大白。又行溪。又數曲。隨峰勢上下。或激雷噴雪。或浮膏凝碧。峰影爲之或碎或全。似水妬山而亂其影也。至屈智林。溪稍開。有小村。過一橋。自此行溪北。開者益開。數十里。詣古城正行寺。寺主舍公。余故人。疾余既久。余先詔曰。君州山水大奇。舍公曰。更有奇者。使

子目之。居二日。與舍公南行。行田塍間。至仙人巖。巖石突出山頂。舍公指示余。余不甚賞。其明又徑田塍。至羅漢寺。寺据山鑿山作洞。壑橋梁狀。安五百像。余復不甚賞。宿寺前逆旅。挑燈而談。余曰。山不得水。不生動。石不得樹。不蒼潤。所以余賞馬溪。而不賞仙巖。至於羅漢。則人工耳。然皆馬溪之支裔矣。且馬溪。溪山相迫。無田塍礙目。而其路坦夷。真可遊也。然爲二豐通道。過者慣看。况公等生長此土。宜不覓其奇也。余則再遊不可期。將復溯之以諦觀之。舍公奮袂與偕。早發。過一水。北出馬溪口。峰容樹色。忽覺迥別。自淺入深。自平入奇。泝前數曲者。一曲奇於一曲。比諸前遊。更可喜也。復至絕壁下。孤店。店主識余面。驚曰。是前喫猪客也。有何幹。再來此耶。余曰。欲看山耳。曰。山有何好看。吾不禁子看也。遂席溪畔。與舍公傾瓢一醉。宿山寺。明雨。借轎西還。山峰得雨。皆變幻作態。或前以爲一山者。分成數峰。如群仙駢肩。露其半身。萬松振鬣。鼓濤於雲中。又如廿五菩薩奏樂而至也。還至屈智林。舍公慮吾酒盡。預戒家僮。馱樽於馬來。取醉宿阿保村。翌歸寺。又三日辭去。踰海東歸。自海雲中。願望鎮西山。岳其闕。豐前者皆有別態。彦山其尤大者耶。馬山

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百六十三

昇仙峽

なる脚字を壯にす
 若し夫れ霜紅と
 横はり木葉紅と
 らし黄と益々水愈
 度く露はれて益
 岩愈々潤に到れ
 入るは在來江
 湖に知られずと
 も東京附近に在り
 と探らん欲せば
 須らく一遊すべし

登立し「天狗岩」亦た頂上に突起す、漸く北行せば天保十一年此
 路を開鑿せし農夫田右衛門の碑あり、「石門」に入る、兩岩相抱擁し
 身像を刻し、上に林檎葉の聲あり、「此處」遠雨岩、右に突起し
 「四尊」左に盤踞し、兩壁夾立し、中に一線の天光を漏らし、岩首な
 花崗岩、松樹其の隙より亂生し、岩に根を敷かせ、扶持自ら守る
 所、奇形、神より少しく北せば、「浮石」あり、雲飄へり虹通き其間
 中に横臥するもの、石の傍に「雲虹瀑」あり、雪飄へり虹通き其間
 音、す、瀑の懸崖に岩面を磨して文を刻す、聲音字と號して讀む
 べからず、所謂「磨崖碑」は是れ、既にして「昇仙橋」に上り、「仙娥
 瀑」を觀る、花崗岩昇立し、瀑其上より流下り、銀繩條瀑、牛は瀑
 に落つ時、轟々として一束の碎雨に異ならず、雨下り、瀑飛ひ奔りて橋外
 に出づる所、雄快一番、人目と壯にす（仙娥瀑より北御嶽金橋神
 社に詣る紀事は第百四十七頁、金峯山の表中に詳なり、参照すべし）

の如き即ち是れ、其他流水浸蝕の激烈なる

たにかはの音には夢もむすはしを

近衛攝政家照公

ねさめの床と誰れなつくらん

花崗岩内部噴
の結水

と眺みたる寐覺ノ床挿畫中に詳なり、の如き、木曾の懸橋所在の如き皆な
 流水の花崗岩を浸蝕して鑿通せしもの、真に觀て以て壯とするに足る、而
 して流水の此等花崗岩の罅隙に入り、冬間其の結氷するや、結氷の際水の
 分子膨脹すると共に岩は罅隙より摧け其響轟々として猶は萬斛の爆裂
 弾を一時に發霍するが如しとは、木曾甲州山民の往々説く所是れ亦た花

木曾地方の景象

崗岩が其の臨終の豪爽なる、處蓋し木曾地方景象の雄大壯嚴なる、所謂
 そもく、木曾の路は大むね岨のかけぢさかしき山坂にてはのかな
 る溪おひ奥深き山里のみにて見上ぐれば千尋のきり岸青く聳えて
 空をかくし見下せば一筋の溪河白く漲りて玉をちらしあるは木こ
 りの通ふ細路嶺よりみねにめぐりあるは筏をれるす流溪よりたに
 にいり魂を驚かす水の響心をさむからしむる巖の形かの唐人の山
 は人の面よりれこり雲は馬の頭にそひて生ずといひけむもかゝる
 所にこそはと思合はざるしかのみならず年經し林に風おこりて鳥
 の聲ものさびしく古びたる石に霧まどひて瀧の音かそけきなど言
 盡すべくもあらず

かゝるけしきは世に大かた稀なるをこの道をゆきかふ人は常にな
 れてさる所としも思ひたらず豊後の野馬溪上野の妙義山などをこ
 とにふれてこそんしくいひ出でつゝ二なきものに思ふもすくな
 からずそれはた世の常の所にはあらざめれどたゞへば扇などにか
 日本には流水の浸蝕激烈なる事

きたらむ繪ともいふべくやこゝのさまはそのすがた大にしてたけ
たかき屏風横長き巻物をみるこゝちなむせらるゝ心ある人は誰も
しりたらむことながら事の序に驚すになむ
てふもの、全く流水の花崗岩大塊を浸蝕する所に在り。

下岐蘇川記

天保丁酉四月余竣役與兩藩士俱自江戸還取路東山舍輿步行旁探名
勝五月四日下十三嶺晚宿伏見驛連日崎嶇經涉山間頗疲至奴輩把鎗
荷鎧者或瘡痍不能起且開水路之勝熟矣因謀賃舟下岐蘇川至桑名殆
二十里不一日而達乃召舟人戒之翌日夙起趨水濱求舟舟人家在前岸樹
林中閉戶未起阻以灘聲喧喧累呼不達唇焦舌燥久之乃應與其兒隨舟
來迎日已加辰乃發舟狹長薄板爲之呼爲鷓鴣兒纔十三歲耳父在艙兒
在艙各持槳操縱甚習灘急舟走兩崖巒巒一時皆搖當前所見倏忽在後
唯見岸行山走而不覺舟移山皆石身載土松爲之髮而紅杜鵑粧點於其
間腥血如滴又處々有水簾懸焉綵綵瀾瀾墜於潭石上石皆奇狀羅列兩

山陽は火山岩
の水蝕を寫し
拙堂は花崗岩

の水蝕を寫す
岩各一別、最
各異、而し
て其の異を寫
すや一、共に
一代の辭宗、
文采後世に表
はすに足るも
の

岸、或特立若柱、或折裂若門、或若渴驥飲澗、或若臥牛橫道、五色陸離相間、
披率作大小斧劈、間有作荷葉披麻者、濯波浪以出、交替去來、不暇應接、蓋
譎詭變幻中、帶清秀深穩之態、非荆關之筆倪黃之手、不能狀也、雖僕隸輩
不解山水之趣者、皆連呼奇不絕聲、忽遇一大巖屹立水中、舟殆觸之、少誤
則壘粉矣、衆懼而默、舟人笑振柁避之、概掠巖角過、如此者數處、未嘗差絲
毫、但經巖際、波激舟舞、飛沫撲人、衣袂盡濕、回視僕從、各握兩把汗、殆無人
色、舟人甚間暇、從容吹煙而坐、視上流船併力挽上者、難易懸絕、已而離峽、
漸平遠、犬山城露於翠微上、粉壁鮮明、衆望見歡然、比至城下、又有暗礁、
舟者然欲裂、衆復相顧瞿然、過此以往、漁舟相望、歌唱互答、衆心始降矣、蓋
始發抵此、爲陸行半日之程、不一餉時而至、其快可知矣、嘗讀盛廣之鄜道
元所記、誇稱江水迅急之狀、至唐李白述其意云、千里江陵一日還、平生竊
疑以爲文人虛談、今過此際、始知其不誣也、但舟行甚迅、不能徐翫、峽中之
勝、爲可恨已、又三里抵笠松、鳴鐘方報已、登憩岸上店、目猶眩、仰見屋椽、動
搖不定、暝坐良久乃止、進饅脆美媚口、此行跋涉山谷、蔬食彌旬、獲之以解
日本には流水の浸蝕激烈なる事

菜飯已復入舟岸愈濶水愈緩險阻已遠無復可觀枕藉而臥風方逆舟人用力拊摺甚勞槳聲喧聒使人煩寃午下稍得風便揭帆復走衆乃睡熟比醒達於桑名日尙高謝遣舟人登陸而行至四日市宿焉自伏見至此殆爲二日半路程道上行見家家插菖蒲彩旗翩然繚風衆在行旅倥偬涉日殆忘月日至是乃知鬪端午節不圖今日舟行爲吊屈之舉抑亦奇矣且舟凌危險布帆無恙免爲汨羅之鬼不亦厚幸乎蓋天下之至奇至美者每在於艱難危險之地不獨山水之勝也求之者比於入虎穴探龍領危而後有所獲矣余於是乎有感焉未可以語千金之子也姑記之以示苦學勵行之人

齋藤拙堂

花崗岩の流水は銀河の如し

且つや花崗岩たる多くは白色に、雲母、石英、長石、角閃石の各結晶より組織せるを以て、流水の之れに衝るや、

砂川にて白く長し誠に銀河と云ふべき(河内名所圖會)

てふ天ノ川(河内)の如きを造くり宛として銀河の懸るが如く、水晶簾を斜に垂るゝに似會秋月の皎然として浮び出づるや、之れに映じて燦々たる

花崗岩溪と月

もの更に反射して一層の清輝を添へ所謂

名月のかつらや浮木あまの川河内天ノ川

やま白しまことに月の御影石攝津御影山

自 慶 枝 静

の観を現じ来る況んや此の如きの月光矢矧參河の花崗岩溪谷を照らして其の千軍萬馬の古戰場に映じ笠置山(山城)の花崗岩峽に入りて元弘帝蒙塵の故趾に輝き、湊川(攝津)兩岸の花崗岩沙に反射し嗚呼忠臣墓臺の花崗石に反射するに到りては、其の踔厲跌宕なる真に言ふべからず、獨り月のみならんや、梅花も亦た然り、若し夫れ溪流一道、花崗岩を穿鑿し來り、梅樹、懸崖峭壁の間に綺錯し、槎枒横斜、花影倒まに水に照し、花や玲瓏、水や晶明、宛として萬玉を累積するが如し、梅花の絶勝たる月ヶ瀬(大和)の如き實に是れ、若し夫れ月ヶ瀬の梅花、月と映發するや、

花崗岩溪と梅花

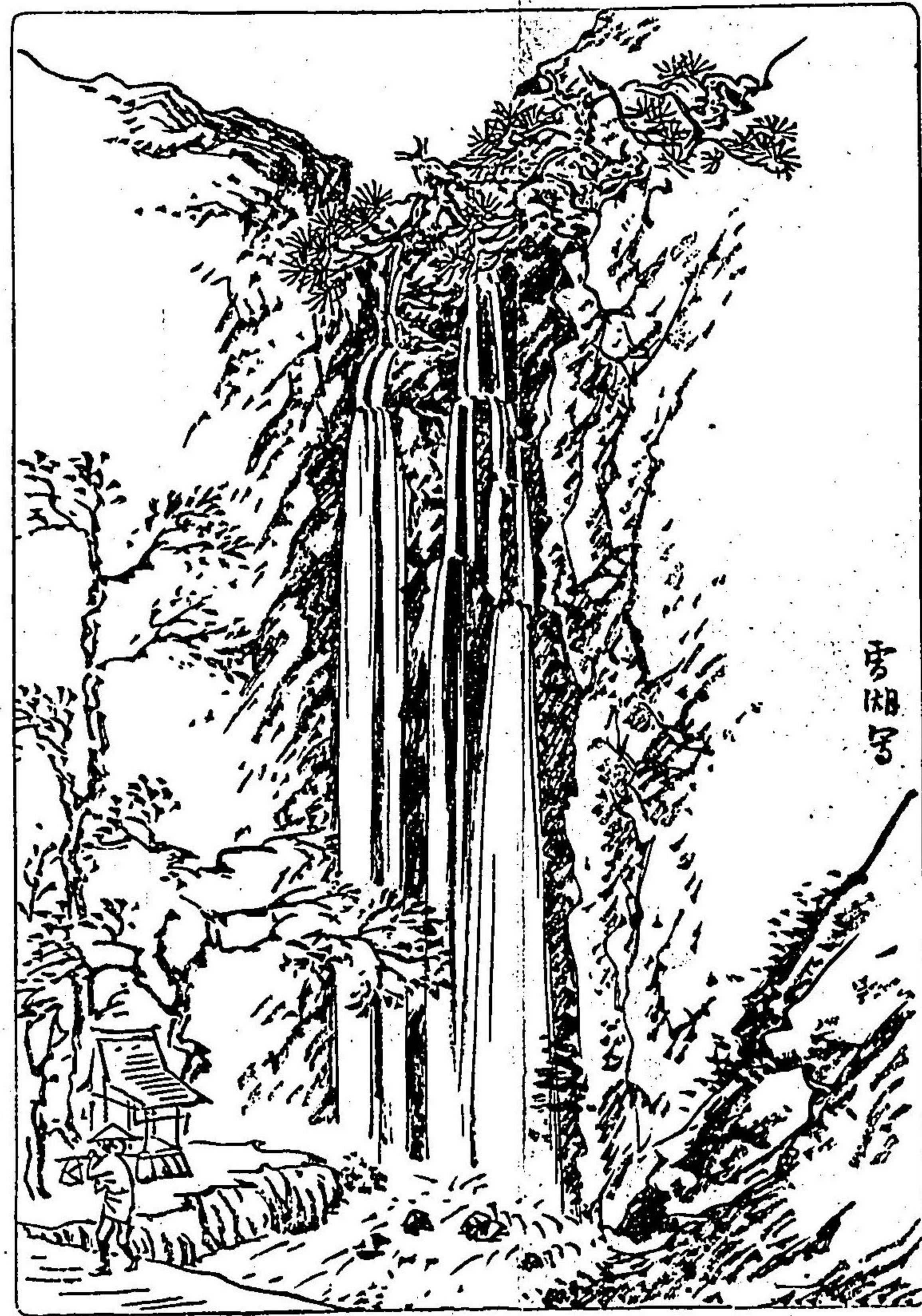
月ヶ瀬の梅花

時將三更、月色清朝、步抵真福寺、枝枝帶月、玲瓏透徹、影盡横斜、寶鈿玉釵

錯落滿地、水流其下、鏘然有聲、覺非人境、傍岸西行、前望月瀬、水清如寒玉、

漾月影、燈作銀鱗、而兩山之花倒蘸其上、隱約可見、一棹中流、山水俱動、吾

日本には流水の浸蝕激烈なる事



小野ノ瀧

(側左上途ル到ニ驛原須リヨ驛松上道街替木)
岩崗花し發り山越風水溪 尺六幅尺百サ高
明品色水すなを布瀑てり懸に崖斷り來ち穿



駒ヶ嶽

(△望ニ北東リヨ端南ノ驛松上道街替木)
の等雪氷霜雨風氣太り成り山岩崗花く全は嶽
む極々渾雄拔奇く如の此形状の其り因に蝕没

月ヶ瀬の梅花に
勝絶する偶附に
あらず

日本には流水の浸蝕激烈なる事

平生之願至是酬矣

となり雪と映發するや

丹崖碧巖悉化爲白玉堆花亦加素彩如粉傅何郎之面其美更增一俯一
仰入目皚然獨溪光益碧作縹玉色耳梅溪之清於是焉極矣古人論梅謂

讓雪三分白然雪以白勝梅以艶勝各有佳趣 齊藤拙堂

となり月雪と相合せて映發するや

山雲飾白界斜陽萬玉歛容如讓光與雪相爭應不屑待他月姉闢明妝

張氏紅蘭

となる而かも梅花を映發するもの豈に獨り月と雪とのみならんや溪は
花崗岩なるを以て皓乎たり燦然たり水は花崗岩を穿鑿するを以て清冽
なり晶明なり梅月雪を全体より大に映發せしむるは主として花崗岩に
在り月ヶ瀬の梅花を以て勝絶する偶附にあらず若し夫れ所在の地勢急
急劇となり遂に九十度前後に到るや流水は即ち瀑布となり怒噴直下す
ること百尺花崗岩屏を穿ちて來り爲めに萬斛の雪を運びて天より擲ち

石灰岩の洞窟

石灰中の炭酸は此の泉流中に溶解し、以て其の特性たる絶大の浸蝕力を逞ふし、爲めに石灰岩は内部に在りて自から溶解し、洞窟を鑿ちて深山中に奇怪を倍す。想ふ石灰岩の洞窟や、大概は口狭くして内寛く、身を側て、洞門に入り、五躰を伏して蛇行すれば、漸く大に漸く寛く、燭を擧げて凝視するに、虚明玲瓏、洞頂洞底、石鐘乳、萬千株、或は森然として上より倒まに垂れ、或は盪乎として下より豎立し（所謂「底鐘」）、巨なる者細き者、長き者縮まる者、鋭き者、上下相迎へ、或は未だ合せざる者あり、或は僅かに合したるも未だ其の合所の細き者あり、或は合すること業既に久しく合所の太まりて一柱と化成せる者あり、其他石灰の洞壁に沈澱する者、磊落踈厲、踞りて虎の如く、獅子の如く、立ちて人に似佛に似、燭火に近き者は鮮紅色、稍遠き者は雪白色、遠き者は藍靛色をなし、光彩多變、而かも火を挑みて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底鐘、石鐘柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰かも聴く、泉流の冷々として遙かに自然の音楽を奏するを、人をして杳然として仙窟の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

秩父二所ノ八音地内ノ觀音岩ノ胎内岩窟

秩父郡秩父町より西南凡二十町、洪積層地と踏み、行々武甲山の秀色を左に仰望し、上杉郡に到り、左折して細徑を行く、武甲山麓に達し、其の下部に洞窟あり、所謂「八音地」は是れ、洞窟の狭く、洞窟に入り、一人づゝ無聲して進む、洞窟の奥に石鐘乳あり、其の形は、龍の如く、獅子の如く、立ちて人に似佛に似、燭火に近き者は鮮紅色、稍遠き者は雪白色、遠き者は藍靛色をなし、光彩多變、而かも火を挑みて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底鐘、石鐘柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰かも聴く、泉流の冷々として遙かに自然の音楽を奏するを、人をして杳然として仙窟の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

出流ノ岩窟

下野下都賀郡の西に在り、北野下都賀郡の西に在り、岩窟は、洞窟の狭く、洞窟に入り、一人づゝ無聲して進む、洞窟の奥に石鐘乳あり、其の形は、龍の如く、獅子の如く、立ちて人に似佛に似、燭火に近き者は鮮紅色、稍遠き者は雪白色、遠き者は藍靛色をなし、光彩多變、而かも火を挑みて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底鐘、石鐘柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰かも聴く、泉流の冷々として遙かに自然の音楽を奏するを、人をして杳然として仙窟の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

天ノ岩戸

志摩郡志摩郡津坂峠の南腹に在り、一名「滝登高」地下の泉水石灰岩を浸蝕して此の洞窟を穿鑿せしもの

日本には流水の浸蝕激烈なる事



柱 泥

(浦坂瀨郡井坂國前越)

他其、氣蒸水るせ帯携の風海、風海、分水 餘尺十五サ高の柱
す成化と柱るな怪話の此に竟り因に蝕没の般諸部外部内

奇巖
石門
深溪
流水の浸蝕
に伴へる他
の現象
天界の虹と流上
の虹

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百七十八

和澄海として班岩を穿鑿し來り、九天の雨潦一時に濁ぎ下るに似雄大莊
嚴、日本第一の稱ある那智ノ瀧紀伊第三紀層岩を穿鑿し其音奔霆の如く
激町の外に返響する龍門ノ瀧大隅の如き日本の所謂大瀑布なるもの即
ち是れ其他流水浸蝕の奇抜なる結果には岩船越の岩船河内交野郡巖船
村高サ六米突餘長サ十五米突船に似たる巨岩葛城山中なる久米ノ石橋
(河内石川郡平石村幅一米突長サ二米突半の巨岩面に橋板の如きもの四
枚ありの如き奇巖多摩川上流武藏川合參河豐川の上流鐘坂丹波明智光
秀の城墟傍近の石門五串溪陸前猿橋甲斐泥入町(紀伊)山伏谷美作津山
川の穿鑿せしもの左岸に地藏巖あり家溪備中の如き深溪あり其の

(五) 流水の浸蝕に伴へる他の現象

に到りては小虹の起るあり溪聲の大なるあり岩石の磊落瑰奇なるあり。
若し夫れ雲行勃々風に驅られて奔騰し山背に衝りて少しく停り電光此
間より一閃して雷聲殷々須臾に風止みて雨粒垂直線的に下り倏忽にし
て萬丈の彩橋雲雨を破りて現はれ一端は高嶺の絶頂に架して一端は溪

花崗岩の上には存在する
 元 日 一 十 五 年 五 月 十 一 日
 際 の 際 の 日 一 十 五 年 五 月 十 一 日
 五 山 劍 五 山 劍 五 山 劍 五 山 劍 五 山 劍
 雨 大 雨 大 雨 大 雨 大 雨 大 雨



五山劍
 陰谷劍影雲
 西海風影雲
 白日雲影雲
 何處雲影雲
 尾池劍影雲

下の水を飲み其間幾多の小山嶽を杭となし、睥睨一空、雲雨之れを看敢て
 献せずして寂然逃げ去るもの實に虹にわらずや、而かも虹の天界に現は
 る一回に一個若くは二個に止る流上の虹に到りては然らず、

瀧の中より虹數十條起り錦を織れるがとく誠に見事なり大隔龍門ノ瀧
 てふ如く懸瀑灑々碎雨をなす處若くは流水亂石と闘ひ噴沫四迸飛洞跳
 梁する處日光會之れと反映するや七色嬌麗到る處に小虹を吐き遙かに
 天界の虹と相應じて大量小量上下數重倚立互に配對す是れ絶愛するに
 足るもの

溪聲に到りては日本の溪谷は浸蝕の激烈なるが故に兩岸峭然斗崖側立
 爲めに流水音響の震動線は恣に外に放散するを得ず音響峽内に凝結す
 るが上に峭然たる斗崖に反響し兼ねて石に觸れ凝と撃ち正響反響相發
 し相應じ加ふるに日本の陸面は傾斜急劇に且つや水蒸氣の多量なるを
 以て溪聲は愈益大となり自然の大音楽を奏するを聴く
 岩石は浸蝕の激烈なるが爲めに千變萬幻し且つや水力の猛劇なる克く

日本には流水の浸蝕激烈なる事

流水と岩石の狀

溪聲

「辨魔の携へ來りたる石」天狗の持ち來りたる岩

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十

巨大の岩石を山中より下流に運搬し、里人の辨魔の携へ來りたる石、天狗の持ち來りたる岩など、稱ふるもの多くは是れ想ふ石、水に頼りて或は平大となり、尖峭となり、或は横臥し、直立し、或は龍盤し、虎踞し、或は岸に臨みて流を探り、水に浸して半ば露はれ、或は碎石滾々として蕩漾し、沙脚兼鼓の間に隠見し、石の氣韻、水を得て茲に初めて生動す。要するに流水の浸蝕に伴へる他の現象や、亦た頻りに日本國の景象に美を倍し奇を添ふもの。既に流水の浸蝕を云ふ是に到りて

湖水の浸蝕

(六) 湖水の浸蝕

を叙述せんか、湖水は面積素と小、故に風一たび蓬々として起り、波浪を振ふに當りては其の振ふべき範圍小なるが故に、波浪個々は却て猛となり大となり、咆哮洶湧、沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕す。琵琶湖の如き之れに注入する諸河流の渣滓泥土に因り、沿岸に新土壤を沖積すること多しと雖も、時に亦た沿岸の土壤を浸蝕することあり、竹生島は蓋し太古に於ける陸地の古趾、堅硬なる花崗岩より構造さるるを以て、湖水は輒ち浸蝕

竹生島

し得ず、石壁森然、以て今日に残留する所因

竹生島のそばに小島あり、これほもとさきに生ぜし島なり、又まゝ子島ともいふ、勢田川の下流に黒津の大日山といふあり、此小島はむかし竹生島かけてここにどまざりし山之といふ故に、毎年三月三日島つなぎといふ事あり、廻七十五間水面より高さ九間六寸又ここに島つなぎ松あり、近江名所圖會

と、口碑宛然、地勢の現象と相適ふ、太古琵琶湖の沿岸を浸蝕せしこと推知すべきのみ、其の

海水の浸蝕

(七) 海水の浸蝕

に到りても亦た然り、日本の海岸は多雨多風水蒸氣多量なるが上に、風激し、濤亂れ、亂濤と海洋中の鹽分とは、外部より内部より沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕し、岩石爲めに崩墜するや、風や、濤や、鹽分や、共に此の崩墜せる岩石を驅り來り、驅り去りて、削器となし、浸蝕力更に一層、或は奇礁を碁峙せしめ、或は隴絶なる海角を刻出し、或は怪巖を紛錯せしめ、或は洞窟を

日本には流水の浸蝕激烈なる事

百八十一

鑿ち、或は石門を闢く、洋客の日本の海岸を咏するあり、

“Where sombre pines and feathery bamboos joined

In constant contrast, ever green; and peeps

Adown the sheer face of the jutting crag,

Where blue-green waters lapped among the rocks,

Swishing with sea weed, and the hollow caves

Resounded with the tide.”—Rev. A. Lloyd.

此の如き句、日本の海岸を譽せんば、竟に盡し得ざるもの、更に洋客の長崎の風物を賦するあり、

“When morning dawned a glorious scene displayed

Its coloured splendours to the trotters' view:

That land-locked haven a wondrous picture made,

For three miles stretching out in shimmering blue,

Within its circling belt of hills embayed,

*

With creeks, and coves, and crankings not a few:

So some old voyagers who were on board

It seemed good's as a Scandinavian fiord.”—A. Miall.

と、獨り瓊浦の「十八灣」のみならず、九州の西海岸や、犬牙鋸齒の如き彎曲を彫鏤し、恰好たる諾威の「フヨルド」其の

孤洞如秋月、海口霧始空、扁舟直穿過、似欲向蟾宮、(山水奇観) ても

坊ノ津

薩摩川邊部の西南、坊ノ岬西南位に斗出する處、一大石門の海上に兀立するあり、「秋月洞」に在る港灣たり、洞ニ名く、利刃の如き二岩海上に堅立するあり、「懸石」と稱ふ、此處泊岸出入多し、此處到る處海水浸蝕の痕跡歴々徴すべし、景物跌宕、眞に奇観たり。

の奇観を造くり、景物到る處跌宕、其他對馬の海岸も亦た然り、(挿畫中に詳なり)、四國に到りては、伊豫の佐田岬、長嘜海中に延曳する九里、其の極西端遙かに九州の地藏岬(豊後)と相應對する處、太古紀層の堅緻なる岩柱、矗々として幾個となく海上に森立し、怒潮佐賀ノ關海峡より闖入して、益々柱を刮削し、眞個に日本の偉觀をなす、其の土佐の

日本には流水の浸蝕激烈なる事



二見浦 岩 婦 夫 浦 見 二
 太平洋の浪來り撃ち岸を蝕し以て此の象と成化する
 古は層の最下部に輝る石及び斜長石の片り成す
 縁泥物と雑す以ては甚だ泥片に似る



冬 島
 (日高圓似 泉到岸 海に到る 西脈脈の 石岩の 此に象と 成化する)

行々轍ち太古瀕海の當時を想起せしむ。

之れを要するに日本の國土たる内陸の水海洋の水共に其の浸蝕劇烈なるが爲め地裂け山開き危峯削られ怪巖蟠り石門闢き飛瀑下り鬼窟穿ち島嶼起り懸崖洗はれ巖罅屈折し長嘴短角凸兀出し瑰偉峻峭變幻詭曲を極盡す眞に日本の絶特其の挿畫中なる越前濱坂浦の泥柱は内陸流水の浸蝕して刮削する所夫の舟人の拜崇せる北海道神威岬端の神威岩は海水の浸蝕して彫鏤する所。

忍路高島不可企歌棄磯谷嶺可矣奥嶺越兒顔如玉琅琅唱出追分曲一唱二唱皆悲涼不知何聲適我耶。

傳云昔者延府源義經眠觀夷一酋長之女不告別而往滿洲女追到神威海角不及復望延府之船頭身慟哭呪曰和人之船載婦女過此則覆沒矣遂化為石後人崇石名神威巖神威者夷語猶曰神從是本州之船不復載婦女而入于海角以東忍路高島在角東歐夷磯谷在角西追分之曲故云德川氏之末織部正親正親爲箱館奉行俄然曰生育植養者天道也豈有天孫之裔不可殖於蝦夷之理哉乃繼大經滿載婦女放巨艦而過神威海角本州人移住蝦夷內地者始于此。

日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

絶代の大作、曠世の傑品を新創せんぞ欲せば、日本國土絶特のもの、即ち水蒸氣、火山、流水の没蝕に寄託するを要す

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

百八十六

(五) 日本^の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

島帝國の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士にして、寂焉として草木と併び朽ちんと欲せば止む、而かも雄大卓落たる技倆を揮灑し、絶代の大作曠世の傑品を新創せんぞするが、須らく日本國土絶特のものに寄託せんことを要す。天桃、白李、嫩綠、軟紅、佳は則ち佳、何々の三景、何々の八景、愛すべきは則ち愛すべし、而かも是れ未だ諸君子が滿腔の心血を澀ぐに足らざるも、の諸君子が滿腔の心血を澀ぐに足るは、彼の水蒸氣に在り、活火山、熄火山、火山岩に在り、流水の激烈なる浸蝕に在り、日本、水蒸氣の變幻開闔や、千態萬狀、森羅せる景象、悉く其間に隱見出沒す、眞成なる審美家が造化の太秘を探らんとし、大極の至妙を悟らんと欲せば、水蒸氣の變幻開闔に依らずんば、到底能はざる所、萬化を冥合する實に此の一氣より來る、諸君子何ぞ之れに依らざる、其の活火山、熄火山、火山岩も亦た然り、自然の大活力を認

北海道に一遊すべし

識し、高邁雄拔の心懷を寄託せんと欲せば、遂に之れに頼らざるべからず。流水浸蝕力の激烈、是れ我を恢弘し、我を豪爽たらしむ、苟くも此の水蒸氣を寫し、此の火山を刻み、此の流水を描かんとする者、豈に庸々齷齪の徒の爲し能ふ所ならんや、諸君子にして志墮ち節摧け、唯々として俗と俯仰し、平山凡水の間に満足せんとするか、此の造化の日本に厚賚する所を如何せんとする。且つ夫れ諸君子一たび北海道に遊ばんことを要す、想ひ看る、寒海流親潮、東より來り、溫暖海流、黒潮の支派、對馬海流、西より到り、兩々の相撞撃するや、水蒸氣飛噴して、白神岬頭渡島に凝結し、雲霧四合、其上より岬頭の峯尖高く半天に孤聳する處、其のカモイコタン(後志)の絶壁三四百尺、朔風蓬々として滿洲より吹き當り、亂濤奔馬の如く壁下に迫りて、碎沫鏡路に飛瀾し、凜笛長嘯、鐵車黒煙を噴きて、壁道に入る處、其のマップコップ(石狩)の山上、彌茫六十里、石狩の大江、汪洋として、其間に曲折し、田疇墟落、秩々として、畫くが如く、新開地の活氣、鬱勃たるを映出する處、皆な諸君子が心懷を寄託

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

百八十七

原人時代の景象

日本の文人詞客畫師彫刻家風懷の高士に寄語す 百八十八
するに足れり、特に心懷を寄托するに足るは其の原人時代の景象是れなり、北海道自然の景象や假裝せず、矯飾せず、儻々萬古實に化工の有的儘を開展す、絶代の大作曠世の傑品豈に此間に發せざらんや。

既に日本江山の洵美を盡述す、而して是に到り感慨に禁へざるものあるを如何、蓋し皇天の此の洵美なる國土を日本民族に賜與するや、更に今日より大なるものありき、岡本草庵をして

樺太島の風景

余嘗行天下、察其各土之風、如平安、水清山秀、風景極爲佳麗、而人心纖盡、無大國之風、浪華則俗、江戸則粗、皆不慊人意、窃思莫如我郷之樂、余阿波人也、郷爲三谷、倚山成邑、谷遂峯秀、老木千章、蒼翠蔚然、凌青霄、殆都會之所未有、平生以此自負、及航北海、覽雄城大樽間等山川、則爽然自失、及闕島内諸處、益覺其勝出人意料。

臺灣島及び山東半島

と紀せしめたる夫の樺太島を失ひたる即ち是れ然れども我皇の版圖にして臺灣島に擴張せば、熱帯圈裡の景象は新に日本の風景中に加はし來り、兼ねて山東半島にして我皇の版圖に納まらんか、山東半島は支那人が

富士山と岱宗
をなすべし

古往今來、岱宗と仰望する泰山の在る處乃ち新山河の雲煙水光を描き出し、日本風景論の材料を膨大して、改刷重版し、以て更に風懷の高士彫刻家、畫師、詞客文人の一大祭を博せんか、料り知る、我が富士山を岱宗となし、千島富士、千島國後島、千島ノボリ、蝦夷富士、膽振後、方羊、蹄山、津輕富士、陸奥岩木山、南部富士、陸中岩手山、吾妻富士、岩代吾妻山、彙中、一名小富士山、榛名富士、上野榛名山、彙の最高點、鎌倉富士、相模屏風山の傍、伊豆富士、伊豆加茂郡大室山、八丈富士、八丈島西山、一名甌釜、近江富士、近江三上山、都富士、山城、近江境上の比叡山、有馬富士、攝津有馬郡尼寺村角山、播磨富士、播磨明石町と三木町間のメカウ山、伯耆富士、伯耆大山、安藝富士、安藝廣島市傍近、讃岐富士、讃岐飯ノ山、小富士、伊豫與居島、筑紫富士、筑前志摩郡可也山、里稱親山、豊後富士、豊後由布嶽、薩摩富士、薩摩開聞嶽と共に、臺灣の最高峰玉山は宛如我が富士山に形似するを以て、臺灣富士と轉名し、山東省の泰山は山東富士と變稱し、齊しく我皇の版圖中に在りて富士山の名稱を冒さしめんことを、日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風

「臺灣富士」

「山東富士」

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

名所圖會類に到りても亦た然り想ふ名所圖會なるもの過去に於て人々に旅行を奨誘し山水の間に優游するの好風尚を勾引したる感化や著大にして今日に當るも憑據するに足るもの多し是れ固より棄つべからず

みやき野の萩や小鹿のつまならん花ささしより聲も色なる

さまく心に心そとむる宮城野のはなのいろく蟲の聲く

宮城野の風まぢ詫るはきか枝に露をかそへてやどる月かけ

あき萩の下葉の露も色つきてうつらなくなる宮城のまはら

哀いかに草はの露のこはるらん秋風たちぬみやき野のはら

鹿の音もむしもさまく聲たえて露かれはてぬ宮城野の原

と古歌に咏み玉露金風蟲聲萩花千古の韻事を留めたる宮城野陸前も

吟節攬勝入煙蕪野草野花路欲無惆悵當年幽絕處近來鋤地種蘿蔔

松井梅屋

曰 人

宮城野を大根植てへらしけり

となり了はんぬ美や利と未だ相調和せざる由來同一の感慨

美利と未だ相調和せず

亞細亞大陸地質の研鑽、日本の地學家に寄語す

(七) 亞細亞大陸地質の研鑽 日本の地學家に寄語す

是れ日本風景論を帥し了るに當りて言ふべきもの想ふ日本東洋の表に立ち地質固より西大陸と等しからず故を以て西洋地學家が定用する所の術語は日本の地質系統を概括するに不明瞭不便宜なる所多々是れ日本の先輩地學家が三波川層御荷鉾層秩父系小佛系三倉層八坂層御坂系等の新術語を創作せし所因蓋し彼土の地學家所在の岩石に命ずるにローレンシヤン系ヒューロニヤン系キムプリアン系シルリヤン系デヴァニヤン系ジュラシヤン系等の名稱を以てするものは是れ此の如き岩系の亞米利加英吉利佛蘭西に多在するを以てのみ而かも日本や素と亞細亞大陸より分離せる一大陸島遠く太古に遡れば大陸の一部分故を以て亞細亞大陸の岩系岩統は日本と等一なるもの多きを知るローレンシヤンヒューロニヤンキムプリアンシルリヤンデヴァニヤンジュラシヤン等の名稱業既に彼土

亞細亞大陸地質の研鑽 日本の地學家に寄語す

亞細亞大陸の地質系統は須らく日本地學家の使用せる新術語を以て概括すべし

百九十四
亞細亞大陸地質の研鑽 日本地學家に寄語す
の地質系統を概括し得亞細亞大陸の地質系統豈に日本の三波川層御荷
銜層秩父系小佛系三倉層八谷層御坂系等の名稱を以て概括し得べから
ずとせんや日本は亞細亞の先輩國たり亞細亞人文の開發は日本人の天
職とする所乃ち西洋地學家の未だ亞細亞大陸の地質を甚だ研鑽せざる
に當り日本の地學家たる者須らく之れを辛苦經營し三波川御荷銜秩父
小佛三倉八谷御坂等の新術語を以て亞細亞大陸の岩石系統に冠せしめ
以て日本理學の令名を千秋に垂れ以て世界の理學に大材料を寄附し以
て日本地學家の使用せる新術語を地學世界到處に使用せしむ是れ日
本地學家の爲す有るべき所にあらずして何ぞ幸に日本の地質圖は先輩
地學家諸君子の辛苦經營に賴りて略ぼ大成す今後の爲す有るべきは實
に亞細亞大陸地質圖の大成に在り想ふて此所に到れば西天を睨睥して
長吁するもの幾回誰れか吾妻嶽上濺ぐ所の鮮血を拉して之れを崑崙の
山巔に濺ぐ者ぞ

雜感 花鳥風月、山川、湖海の詞畫に就て
日本國を構造せる主要の岩石

(八) 雜感 花鳥風月、山川、湖海の詞畫に就て

◎(第一)日本國を構造せる主要の岩石 を先づ參考の爲め列
舉すべきか。

水成岩

無生大統

片麻岩類、雲母片岩、角閃岩、大理石、Sclerite岩、
滑雲母片岩、雲母片岩、紅糜片岩、Glimmer片岩、斑點石炭片岩、斑點滑雲母片岩、斑點綠泥片岩、綠
泥片岩、等

古生大統

秩父系
一 輝岩、石英岩、石灰岩、Anthole板岩、古生紀凝灰岩、砂岩、粘板岩、礫岩、角岩、Radiolaria板岩、等
二 小佛系
粘板岩、砂岩、Anthole板岩、

中生大統

一 三疊系
粘板岩、砂岩、頁岩、礫岩、石灰岩、
二 珠羅系
粘板岩、砂岩、頁岩、石灰岩、
三 白堊系
砂岩、礫岩、凝灰岩、頁岩、粘板岩、石灰岩、

雜感

近生大統

第三紀 凝灰岩、砂岩、礫岩、角礫岩、凝灰質砂岩、頁岩、泥灰岩、礫土、等
第四紀 壤土、砂、粗質礫岩、粘土、等

火成岩

古噴岩 花崗岩類、石英斑岩、閃綠岩、石英閃綠岩、橄欖岩、斑輝岩、蛇紋岩、蛇紋岩、輝綠岩、閃綠玢岩、輝綠玢岩、等

新噴岩

石英粗面岩、黑曜岩、真珠岩、浮岩、Dallo、粒狀安山岩、輝石安山岩、角閃安山岩、頑火石安山岩、火山燒岩、玄武岩、等

富士山は名山の標準

●(第一)富士山は、名山の標準

と必ず古往今來皆な然り、富士の山おなし姿に見ゆるかなあなた面もこなたおもても 備門管領都と圓錐体火山を描きて餘蘊なし真個に名山の標準なる哉日本の山嶽富士を標準とし富士の名稱を冒かすもの多々獨り安山岩火山岩たる岩木山開開嶽の

富士見すはふしとやいはん陸奥の岩木の岳をそれと詠めん 定家卿 薩摩かた頼娃郡なるうつね島これや筑紫の富士といふらん 松葉集 歌人しらす

と脈まれ安山岩たる岩手山の南部富士吾妻山の吾妻富士、榛名山最高點の榛名富士、大室山海拔五七五米突の伊豆富士、西山の八丈富士、飯ノ山の「贖岐富士」、奥居島南なる一山の伊豫ノ小富士、由布嶽の「豊後富士」と異稱せられ、玄武岩火山岩たる可也嶽海拔三九八米突の筑紫富士と喚び倣さるるのみならず花崗岩たる比叡山すら

ふりつゝもる雪の頃なほさそなとも都の富士の嶽のわけはの拾遺集
と脈まれ古生紀岩中に噴出せし花崗岩より構造せらるゝ三上山海拔四五八米突は

おもひたつ富士の根とほき面影は近くみかみの山のはの雲 龜孝法師
と脈まれ班岩たる角山海拔四六二米突も亦た

吾妻見ぬ人のためとやうつすらんこゝに有馬の富士の芝山 藤原宗敏
と脈まゐる要するに富士山を以て標準となすは皆な然り、

●(第二)詩文俳諧繪畫は理學と調和適合せざるべからず
想ふ畫人俳人詩人の要は能く宇宙の幾微を吹鼓し神韻縹緲恍乎として

詩文、俳諧、繪畫
は理學と調和適
合せざるべから
ず

自然と同化冥合するに在り、而かも多く之れを悟らず、動もすれば輒ち没
理學是れ事とす、惜ひべからずとせんや、此間に當りて

竹窓夜靜近三更、猶註孫吳眼益明、山雨欲來龍氣動、一池健鯉躍成聲、

菊池溪亭

住みなれしこの里人のいひけらくわすは雨ふらん嶺の白雲、高橋石足

詩歌共に善く水蒸氣の現象及び結果を描くもの、能く理學と調和適合す
るもの、

驟雨と畫くに

●(第四)驟雨を畫くに

畫家大抵は斜線に描くを常とす、而かも

大陽の光線と畫
くに

雨粒は本來垂直線狀に下るもの、其の斜線に傾注するは、會風に驅らるゝ
を以てのみ、若し夫れ雷大の驟雨粒垂直線狀に下りて水面を衝ち、水面處
處爲めに凸騰する所之れを斜線に描くより却て跌宕雄壯を倍すを覺ゆ
●(第五)大陽の光線を畫くに 畫家間、旭光と旭光の外とを分
別せず、午前約九時以後の光線と雖も、紅色の彩具を用ふる者あり、午前約
九時以後の光線は黄色なり、絶えて紅色にあらす、

畫人青涯

●(第六)畫人青涯

畫人世情と伏仰し、黄白を愛み、阿堵物に醜視す、

太俗太俗、曠世の大作、絶代の傑品を新創す能はざる固より然り、畫人青涯
の言行未だ以て悉く訓となすべからず、而かも意味脱灑、天真爛漫、毫も塵
俗の氣なく、飄蹤放跡の間、髣髴として畫君子の本色を得、況んや其の落筆
する所の山水畫間、神に入るものあるをや、感ずる所あり、爲めに傳を立つ、
青涯姓は櫻間、參河岡崎藩士なり、畫を渡邊華山と同門に學ぶ、華山常に人
に謂て曰く、青涯の山水畫、氣韻高尚、予の遠く及ぶ所にあらずと、青涯人と
爲り、眞率無我、平常錢を得ば、輒ち酒に代へ、放浪飄逸、赤貧洗ふが如く、負債
山積、債鬼交門に迫る、乃ち深く門を鎖して、内に沈黙閉居し、時々犬クマリ
戸より竊かに出入して、酒を街上に購ふ、鈴木椿山と友とし、善し、一日椿山、
青涯を訪ひ、其戸を敲く、會、戸内に聲あり、曰く、今日不在と、其聲正に青涯な
り、椿山之れを怪しみ、潛かに戸内を窺へば、青涯裸體にして、獨坐し、傍に一
の衣類あるを見ず、椿山意ふ、此故なりと、戸外を視れば、一單衣洗濯して、竿
頭に在り、椿山衣に觸れて試みるに、既に乾けり、即ち衣を取り、少しく戸を

開き、之れを内に投じて曰く、斯くても猶ほ不在なりやと、青涯乃ち起たんとするに、覆鼻禪なし、側の扇を取りて、臍下を蔽ひ、進みて衣を取り、之れを着し、大聲呼びて曰く、青涯家に在り、青涯家に在りと、青涯又た畫を作くるに、一の文房具なし、僅かに筆硯あるのみ、服部波山弱齡の時、其家を訪ふ、會醬油樽を兩側に置きて、脚となし、上に雨戸を載せ、之れに甕を敷き、以て畫を作す、室中疊席無く、空虚なる米俵を敷き、賓主共に此上に坐して、毫も愧づる色なし、又た一日、四五の友人、青涯と街上に會ふ、青涯曰く、請ふ明朝朝餐前、予が家に到るべし、聊か蕎麥を供すべしと、諸友意ふ、青涯亦貧洗ふが如し、其の子輩を招く殊に異なり、然れども、蕎麥は固と價の賤廉なるもの、青涯或は供すべしと、明旦、諸友朝餐に就かずして、青涯の家に到る、青涯欣然之れを迎へ、談笑數時、而して蕎麥の供なし、衆皆な飢ゆ、而かも強て談笑す、日亭午を過ぐ、未だ供なし、忽ち青涯家を出で、暫くして歸る、衆意ふ、彼れ必らず蕎麥肆に到りたるものと、果して蕎麥肆の丁僮、一大盤を運び到る、衆輒ち曰く、予輩約を踏み、未だ朝餐に就かずして到る、甚だ飢に堪へず、請

沼登に美なからんや

ふ速に盤の蓋を開けと、言未だ訖らず、各手を延べて蓋を開かんとす、青涯蓋を擁して曰く、昨日諸君に約するに、蕎麥の供を以てす、是れ此の壁上に掲ぐる畫幅の潤筆料を以て、蕎麥を購はんと期したればなり、是より前き畫の依頼者は、僕に期するに、今日早天に來り受領せんことを以てす、是れ朝餐前に當り、諸君に蕎麥を供せんと約せし所因なり、而かも彼れ依頼者今猶ほ到らず、僕も飢へたり、諸君の飢へたる想ふべし、僕患へ、街上の蕎麥肆に到り、暫時之れを貸與せんことを求む、肆の主人頑然として應ぜず、僅かに蕎麥の湯を命じ來れりと、乃ち盤の蓋を開けば、沸々たる蕎麥の湯のみ、衆大咲覺えず、絶倒し、各湯を呑みて去る、其の眞率なる大概、此類出で、遊ぶに晝夜を辨ぜず、酒を呑むに限りなく、時々出仕の定時を逸へ、門限の期を過ぐ、然れども、岡崎侯其戈を愛して、惡まざりしと云ふ、青涯の畫作は、東京駒込西善寺に藏するもの、絶品なりと。

●第七 沼登に美なからんや 天地の間、何物か美ならざらんや、幽濕沮洳の處、沼澤水淀の處、人多く之れを厭ふ、而かも其間、豈に美なし

とせんや、淺波水濁りて雨煙の如く、晝見時に拍々し蘆芽未だ短くして、白鷺全身を露はす、豈に是れのみならんや、鯉魚一寸萍蓬草黄く、澤瀉白き間に唵鳴し、南柴胡紫葩を吐きて、螢光點々其上に亂拂す、其他水草の最大最愛嬌なるもの、大抵は沼澤に亂開す、沼澤に美なからんや。

自然の太妙は變々化々限り無き間に在り

●第八自然の太妙は變々化々限り無き間に在り

若し夫れ單趣一様始終永劫に遷轉改新の彷彿すべきなけんか、何の處に向ひてか、竟に慰悦興快を求めんとする。赤道線傍近草樹禽獸怪異富饒而かも自然の妙境は、赤道線傍近に纏綿せざるなり。夫の常緑樹人之れを絶愛す、然れども秋風蟬聲を奪ひ去りて、繁霜滿林を紅化し、草枯れ緑盡き、冬枯れの候わればこそ人に愛づられ、冬枯れの候にして無かりせば、其の愛づらるゝ如何す、此に到らんや、南北二極圈内も亦た然り、混茫一白何の處にか妙味の尋ぬべきや、想ふ東風水を解きて、魚其上に出で、土脈潤ひ起りて、草木萌動し、霞靄漸く舞きて、雷乃ち聲を發し、蟄蟲戸を啓きて、幾多は蝶と化し去り、梅花先づ郊村に綻びて、桃櫻杏梨、二十四番取次に亂開し、百花

狼藉の間、黄鳥は金衣公子の代身として、妙音樂を奏し、燕子到り、鴻雁返へり、虹始めて現はれて、霜既に止み、兼葭芽を抽ずる頃、牡丹芍薬宛かも紅欄干外に媚咲す、既にして、田田蛙聲急に、蚯蚓出で、蠶桑を食み初め、竹筍土を穿ち來りて、紅藍花火の如く、麥秋の季節、黄梅の時期交るゝ、到りて滿庭の新緑半池の燕子花方に、人に可なり、次で炎風來り、螻蛄漸く長じ、白桐花を結びて、睡蓮曉露に披き、雷雨驟かに下りて、一夜積暑を洗ひ去る、既にして新涼動き、氣味水の如く、燈火讀書兩つながら、親むべく、玉露金風、蟲聲滿地時に、鶉鴿鳴きて、鴻雁來り、燕子返へり、菊花紅葉、白霜黄橙、禾果齊しく實る、既にして、虹藏くれ、朔風木葉を拂ひ、熊穴に蟄して、鹿角落ち、天凝り、地閉ぢ、六花繽紛、其の活力の現存を表示するものは、松柏科、厚皮香科、植物(山茶、茶梅、茶茗、側金盞、欵冬、水荊)の如き草類のみ、既にして、一陽來復、春色復た天地に充つ要するに、自然の太妙は、變々化々限り無き間に在り、偶徒れ、草を讀み、ゆくりなく左の一節に會ふ言ふ所、壯大跌宕ならずと雖も、自然の變化を寫し出して、優に神品に入る、是れ此所に抄出する所以

をりふしの移りかはるこそ物ごとにあはれなれ物のあはれは秋こそまされど人毎にいふゆれどそれもさる物にて今一きは心も浮きたつものは春のけしきにこそあめれ鳥の聲などもこの外に春めきてのどやかなる日影に垣根の草もは出る頃よりや春深く霞渡りて花もやうくけしきたつほどこそあれ折しも雨風うちつときて心あわたしく散り過ぎぬ青葉になりゆくまで萬にたゞ心をのみずなやまず花橘は名にこそたへれなほ梅の匂にぞ古の事も立歸りこひしう思出でらるゝ山吹の清げに藤のたはつかなきさましたるすべて思ひすて難き事多し灌佛の頃祭のころ若葉の梢すかしげに繁りゆくほどこそ世のあはれも人のこひしさもまされど人の仰られしこそげにさる物なれ五月あやめゆく頃早苗とる頃くひなのたゞくなど心細からぬかはみな月の頃あやしき家に夕顔の白く見はて蚊遣火ふすぶるもあはれなり六月被又をかし七夕まつることなまめかしけれやうく夜さむになるほど雁鳴きて來るころ萩の

筑波山頂の眺望

下葉色づく程わさ田かり乾すなどどりあつめたることは秋のみずおほかる中略さて冬枯のけしきこそ秋にはをさくたどるまじけれ竹の草に紅葉の散とままりて霜いと白うたけるあした遣水より烟のたつこそをかしけれ年のくれはてゝ人毎に急ぎあへるころがまたなくあはれなるすさまじき物にして見る人もなき月の寒けくすめる廿日あまりの空こそ心細きものなれ

●第九筑波山頂の眺望

山は峻秀高聳なるを以て眺望絶佳壯宏なりとせず常陸の筑波山嚴格なる術語に準據せば僅かに丘陵以上のみ然れども關東平原に巍然と孤尊するを以て苟くも東京傍近に在りて眺望の太快を食取せんと欲せば此山に登臨するを要す佐藤一齋翁の文此際の消息を描寫して妙乃ち之れを抄出す

念四朝雨開霽。自下館至筑波。四里而遠。有間道。由此則可三里。到椎尾。椎尾。阪寄。皆筑波支山。在北麓。山成三層。下爲椎尾。次爲阪寄。上即筑波陽峯。乃從間道。登椎尾。有藥師堂。山多孺猴。進登阪寄。皆石。無樹。無水。純鏗峻絕。

不能目導而脚從登者往々摩突額鼻或呼曰額摩渴輒嚼草以取潤耳頂稍平可踞息又進登陽峯多老樹可攀援既極最高頂雲鳥皆在眼下累石安男體權現祠東下數百步有坦夷處寔二小店鬻餌以待客稍南有泉竅潺潺流注即美那濃川發源處清冽可掬飲又登陰峰亦累石安女體權現祠眺觀益豁近則足尾加波皆可俯撮其髻遠則高原日光秩父諸山聯延綿亘高低起伏而不二山獨巍巍然坐於坤位大山箱根如趨聽使令者當不二之麓見一泓如盆池則浦賀內洋也加納山鋸山亦如培塿蟻垤而外洋一白曳練摩房總諸山頂東趨連於注子水戶其間殘山剩水重抹輕掃烟雲縹渺丹碧點綴可謂關左八大州一幅活全圖也哉乃一周下南麓石間無路有竇穴可出入者三處絕壁峭立有機梯可上下者一處石滑趾不能駐有鉄索下垂下援以升降者七八處山腹有古鐘不知何世鑄造何人移置此山雖不比日光之靈淑與深而危險則不啻十倍至於眺觀亦關以東無出此右者矣

◎第十「百鳥譜」許六「百花譜」を草し半掃雁「百魚譜」を草し也「百蟲

譜を草す皆な一代の俳人其の自然の幾微を寫すや往々神に入る想ふ自然を寫さんとする自然を尊崇するの觀念なかるべからず而かも俳人由來放浪の極筆端動もすれば輒ち淫猥に入りて省みず獨り支考の「百鳥譜」此病に罹らず妙も亦た前數者に譲らず乃ち左に抄出す唯だ末節を削るもの少病あればなり

鶴は仙家のものなり是がみさを人は近からず昔し陶淵明に達摩の風骨ありといへるものは鶴に淵明が風流あることを知らずされば野草の花のあきらかに開きぬる時柴門の月のあらたにすめる夜ならむ此ものひとりは見まく思ふなり然るを鶯の無能にして衣裳もねろそかに侍るはまして風雨にも厭はじとならんかの莊周が夢に胡蝶とあそべる是もむつかしとやは思ふ

雉子の啼く聲はいとかしこきに百矢の數をのがれずやあらんといはれて一朝にたまの命を落しぬるは是も韓信が輩の文武をつくさざるものなるべし

蒼鷹

蒼鷹の人を見こなして、眼の内にあらまかなる才智をそなへたる、いとにくし。されど一藝に名あるものは、世の人それをゆるしもしつべし。

斥鴳 大鵬

かの斥鴳が蓬生の宿は膝をうるゝに過ぎねば、大鵬の雲の万里を羨まず。さらばおのれを樂むのみにして、必ずうらやむ方にもあらず。かの風風といふ鳥はいかなる鳥にかあらむ。

風風

稻負鳥 呼子

稻負鳥呼子鳥とかやはく鳥は春に住むなるよし。なかぬ物にや知らず。椋と椋との二鳥は其實をばめる時の名なるべし。然るを鶉といふ鳥の花にねきふしたらむいと心得ね。木々の花の咲こぼれて明ぼの雪にもまがへる時は、駒鳥の聲のみひやまかにしていとよし。されば此鳥の名は聲のたぐひをいへるならん。おのれがかたちを名にさせるものは、目白頬白のたぐひなるに、鶉は殊にかかし。年々菊をいたまきける自然の理は、おまたねども、ことしはめぐらしう梅花をもかさせよかし。

椋 鶉

駒鳥

目白 頬白

雲雀は小春の空をよくおぼはて、鳥羽の田づらなどにふと啼出たるにかひつけて、啼る鳥もなければ、おはれさびしき物かなと思ふ時もある。

雲雀

三光 佛法僧

三光は啼く時に日月星といふなるよし。むつかしとも思はぬや。佛法僧と啼く鳥ありて、高野の山にのみ住むなる。是をも三寶とこそいはめ。然るに鶯の法華經と唱ふる、さるは世さらに老めきたるわざなり。

鶯

提壺 布穀

提壺の美酒をかひ、布穀の袴をぬけよといふは、皆おのれがゆゑならねど、世の人の然らしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼くは、さはめて托物の聲ならんのみ。

蜀魄

時鳥

秋の雁の江天にかくれ、時鳥の曉の雲にさけぶ、いづれにかさだめ侍らん。雁はおはれに、ほととぎすは悲し。

時鳥

鶉は恩をわすれぬよし。此國にはまれくあればよ知らず。むかし、蔡君が鶉もは、翠琶が身まかりし跡の名を呼傳へしに、心をいたましむ。瘴江のはどり、おなじく遊べども、同じくかへらずといへる。配

燕

所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も物は得言はずして、萬里の別を慕ひ行けるとかや、扶桑十夷志八有飼鳥渡海慕主君之故事是さへ思ひかけぬ事なるべし。

燕もゆかりは忘れぬ鳥なり。終日にひるがへり終日に囀りて、餌には必ず身をつくさずや。いはゞ江湖の僧の一夜二夜にちぎり捨て、身を雲水にまかせたるが年を経て後は見知らぬ人も多かる。されば行脚の身の、人にも送られたのれも送りたらんに、涙のこぼるゝはいかなる時にかあらんか。かの法師の宿かし鳥とよみつゝけぬるより、孤村に出で夕陽を啼盡せば誰が家には今宵もおくらんと、あぢきなき事も思はるゝなり。

鷓鴣

鷓鴣とは名のかしこきものなり。青草の暮の雨には遊子の魂を驚かし、黃陵の曉の雲には旅人の涙を催す。すべて夜啼くものはかなしきに、水鷗は隱逸の風情を得たり。

水鷗 千鳥

星月夜のおぼつかなき比に、磯の千鳥の多くあつまりて啼くは、心

鳴馬渡雁

もさゆへくでかなしたゝ人の別墅なる所に、水の湛もいと淺くて、常は來馴れて遊ぶらん、戸などかいやりたる音に驚きて、忽ち二三聲のすみ行くは、其あとも遙に見送られて、河風寒しと思ひ出たるは、待たるゝ人もなくて何にかはせむ。

白鷗 諫鼓鳥

鳴はましてたつ時のあはれなるに、馬糞といふ鷹の風にひるがへりたる、なまうかひにていとにくし。かの澤の夕暮は江山の風情をそなへたれば、もろこしの雲夢ときこゆし、澤はいかなる澤にかあらむ。

白鷗は人をさけておのれ静なるものなり。然るを諫鼓鳥のおのれ啼て人をさびしがらせむとす。なべて卵の花の曇はいとねふけなるに、夕日の影も木の間にちり残りて、山にはおもひかけぬ、鷓も啼くなり。啼く處のさだかに知れねば、是もいとさびし。此ものは偏に雨の日をかなしめるとかや、百花の深き所ならば、終日ぬるども厭はざらまし。鳥の晝出て迷ひありきぬるいとれかし、必ず笑はれじとはたらきたる顔にもあらず。さるたぐひの老僧にや、ひかしも市中に遊びぬける

雜感

なり。

深草に住むる鴉は其聲すみやかにして世を憚らず山にも近く水にも遠からず粟の穂の静なる時はこゝにも出て遊ぶなるべし。

啄木鳥の飢を忍びかねて木にそひ梢をたゞきあるきて終日静ならぬこそはかなきわざなれ限なき生涯のいとなみとならば誰もくわさましき事多かるべしされば空山の日影に霞たばしりて橋の柏もちりくゝに吹かれ行く比は此鳥の聲の更に幽にしていざや張道士が家をとふらふ人にも似たれ。

木がらしの夜一夜吹かしてしのもめには吹かずなりぬるをさし出る朝日の殊に珍らしうさし籠めたる障子のかざりはもゆるばかり長閑なるに物の影のさど過ぎてまたさきもあへぬはいかなる鳥にか侍らんと、いつもく思はるゝなり蓋し鶯などのゆるやかに舞ありくも隙を過ぐるほどなればあはたかしきか。

軒の雀の晴をよるこびて何やら殊の外に囀る是は市人にもたとへ

雜感

侍らん、鵝は菩提の風情にして人の隙を窺ひありくものなり。家鴨も同じ家においておのれが身を惜しども思はずや、たゞに淤泥のけがれをも厭はすして是を世の外に出て物にもかゝはらぬと思ふはさばかり悟りがたへたる事は世の人の上にもあるかし、そなへおきたる翅も、いつかは青雲の心ざしにあへらむ、誠にあはれむべし。世に人を葬る者ありて、常は顔など見合すべきにもあらねど、なすべさわざあれば、呼で酒のませ價をもやりつ、然るに鵜といふものは詮なき鳥なるべし、早川に魚などかづきあげたる、おのれならずとも網しても得つべし、さるものならば辨へぬこともあるべきに、人の手にかはれて追はみたる魚をも白地に吐かせて、それをめでたしとさゝめかし、笹の葉打させて贈りもふくられもする人は、鳥よりは一しほも劣り侍らんか、鷹は羽の下に鳥を組敷きて、譽を人にも見られむと思ふは、せめて名の爲にもなさばなりぬべし、さらば此ふたつのものを我友となさば打おきたる心のいとまもなからん。

雜感

鷓はたちゐにつれなくて、へつらはぬものなり、子など持たらばいかにあらん。

鷓の風情はいとなまめかし、何がしの中將がわづかに人を思ひそめて、雨にもそぼち露にもしはたれて、常の心もさだかならぬと、色には出でじくどこそ忍ぶなりけり、されど田面にうかれ出て田螺ふみまよふ比は、まさしくさる物のたどへとも覺えずなり。

楚臺の夢は一夜の枕に驚き、廬山の契は萬里の雲を隔つ、朝の嵐に錦帳を動かせば、李夫人が影もふたゞびは盡ることなし、然らば翡翠といふ鳥はいかなる美人の魂にかあらむ、杜子美が衣桁に啼くといへるも、此鳥ならで外はあらじ、名にめで、是を我友となさばはしなき人にやあやしまれむ、名を聞くより其姿の思はるゝ、鷓鷯の中は更なり、瑠璃といふ名は世の人のきくをもかざれるかな。

鷓の聲は滑にして、殊に住所もいやしからぬば、是も美少年のたぐひにはあらめど、風情やゝかたやかならず、まして夜ならぬはいざたなしどもいへりけり。

(以下二節略)

●第十一(發句俳諧) 是れ一般平民の間に清高幽雅の觀念を啓發せしむるもの、絶愛するに堪へたり、十七字の句、眞に絶愛するに堪へたり、十七字の句。

雜感

自然と寫す跌宕
の語

●第十一 自然を寫す跌宕の語

は世間未だ

あら海や佐渡に横たふ天の川

の如く太簡にして而かも太跌宕なるものを看ず、一語大海の胸を盪かし、
歌々たる銀河の金峯山上佐渡を帶する處、歴々眼前に映じ來る。

紀伊の景象と仁
科白谷

●第十三 紀伊の景象と仁科白谷

日本國中、姦阿の形姿を具

へて、萬象の蘊奥を含み、造物の鍾むる處となるも、而かも僻隅に在るを以
て未だ多く人の品題賞鑒に遇はず、幽遠の間に埋没するを紀伊の内部南
部となす。豈に無情の山海のみならんや、有情の人も亦た然り。山林之儒、自
稱仁科白谷の如き亦た是れ、白谷身軀魁偉腕力人に過ぎ、劍客游侠の徒に
交はるの間、海内の名山に登り、巨川を窮め、或は長林に浩歌し、或は絶島に
孤嘯し、氣力邁往、一韵到底の長古一篇五百五十句を賦するに到る、而して
世其名を知らず、坎軻落拓客死して止む、痛むべき哉、其の「遊南紀歌」に曰ふ、
嘗遊芙蓉峰、下視萬國山、手掬星漢水、道遙帝坐間、沆瀣滴我衣、嵐氣撲我
顔、超然遺身軀、吸風立空寰、今我投紀南、洗眼碧玉海、金嶽當水起、雲物渾

五彩、瓊殿參差、練中有真人在、翩翩駕雲車、怡悅如我待、廻眸指點洞開處。
爲說神界勝、幽崖之下澗紺寒、石髓皓皓凝、蒼藤鬱陰黑、翠峭束泉、松脂滴
古香、瓊芝雋鮮、浸淫玉液泄、錯落琥珀爛、可以漱兮、可以餐兮、聽之直揖去。
高吟朝嘯極盤礴、神風冷冷生我展、吹破紫雲幕、千奇萬怪忽有無、無端瀑
布懸寥廓、初驚天駟爭下重九、中訝崑岡頽碎玉、灼終疑帝使風伯吹散雪
山雪、化作萬鶴舞之、九霄碧落對之、清視聽踞石嚼寒葩、神氣益澄凝、冷冽
徹仙牙、凌空更窮瀑之源、俯聆廣樂心更快、因訝再遊芙蓉峰、上手掬漢水
立天界。

又九 紀州雜詩に曰ふ、

南州靈異地、風物一乾坤、山藏秦民骨、谷抱平氏孫、惡苛應浮海、避亂此逃
源、邈矣煙波外、逸書今尙存。
海師方外傑、願讀我儒書、卜地開名嶽、營堂倚太虛、山雲潤柱礎、空翠濕巖
居、詩卷有靈集、讀來或起予。

光滯何明媚、無山不翠微、香刹抱松洞、漁家傍柳磯、魚在鏡中靜、人行畫裏

雜 感

稀夕陽望更好遊子澹忘歸

神女探宮麗管公古廟空桐絲傳夜響梅蕊弄寒紅月冷垂林露香清渡浦

風嘎然孤鶴唳應向紫霄冲

大海浮天漾蓬村處處孤長鯨噴浪去遠帆入雲無水底窺蛟窟沙邊拾蚌

珠遙遙霞正合何路到方壺

界破翠崖來飛流千尺白訝將萬斛珠自碧雲間擲倒走吼銀龍高懸明素

霓疑衣袂濕無處不滌塵

此人にして南紀の鍾靈を讚美して餘蘊なし誰れか其人を得たるを嘆

ぜざらんや白谷備前邑久郡蟲明村の人弘化二年五月播州加古郡今市正

覺寺に窮死する者

●第十四河内の景象

藤井氏撰 藤崎訥堂句あり景象を寫して畫に似

路入河州吾未曾孖山稍近露雙稜蟲聲滿地午猶咽野草秋風何帝陵

●第十五日本人は自然の美を愛す

基督教長老エス、エー、

パーネット貧民問題に關する一篇の論文を二週日評論に寄せて曰く

河内の景象

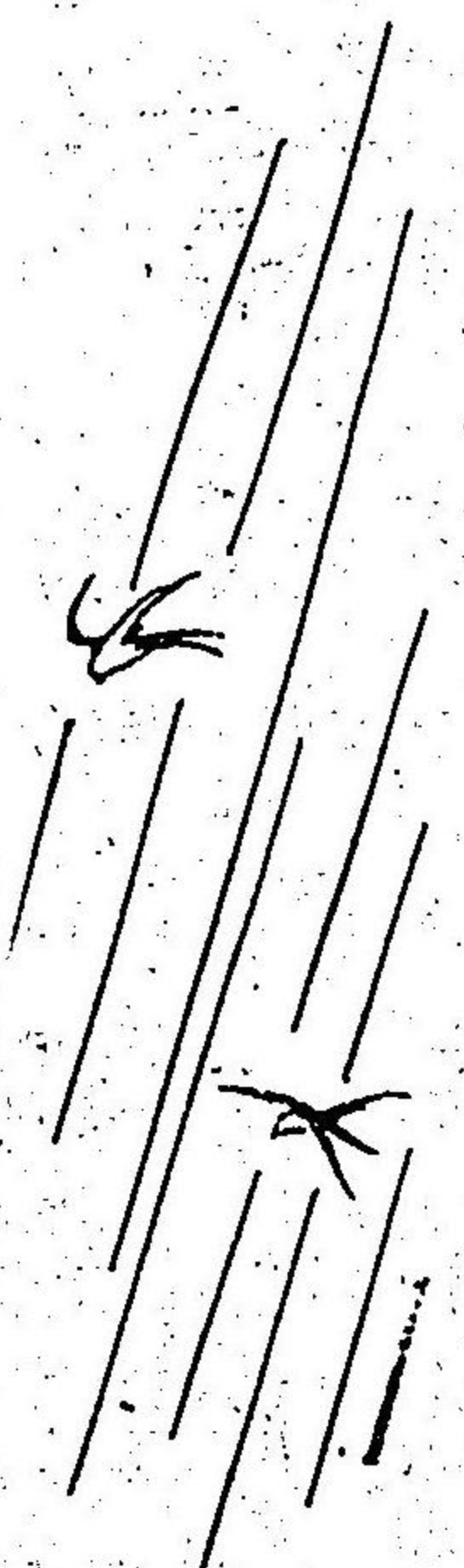
日本人は自然の美を愛す

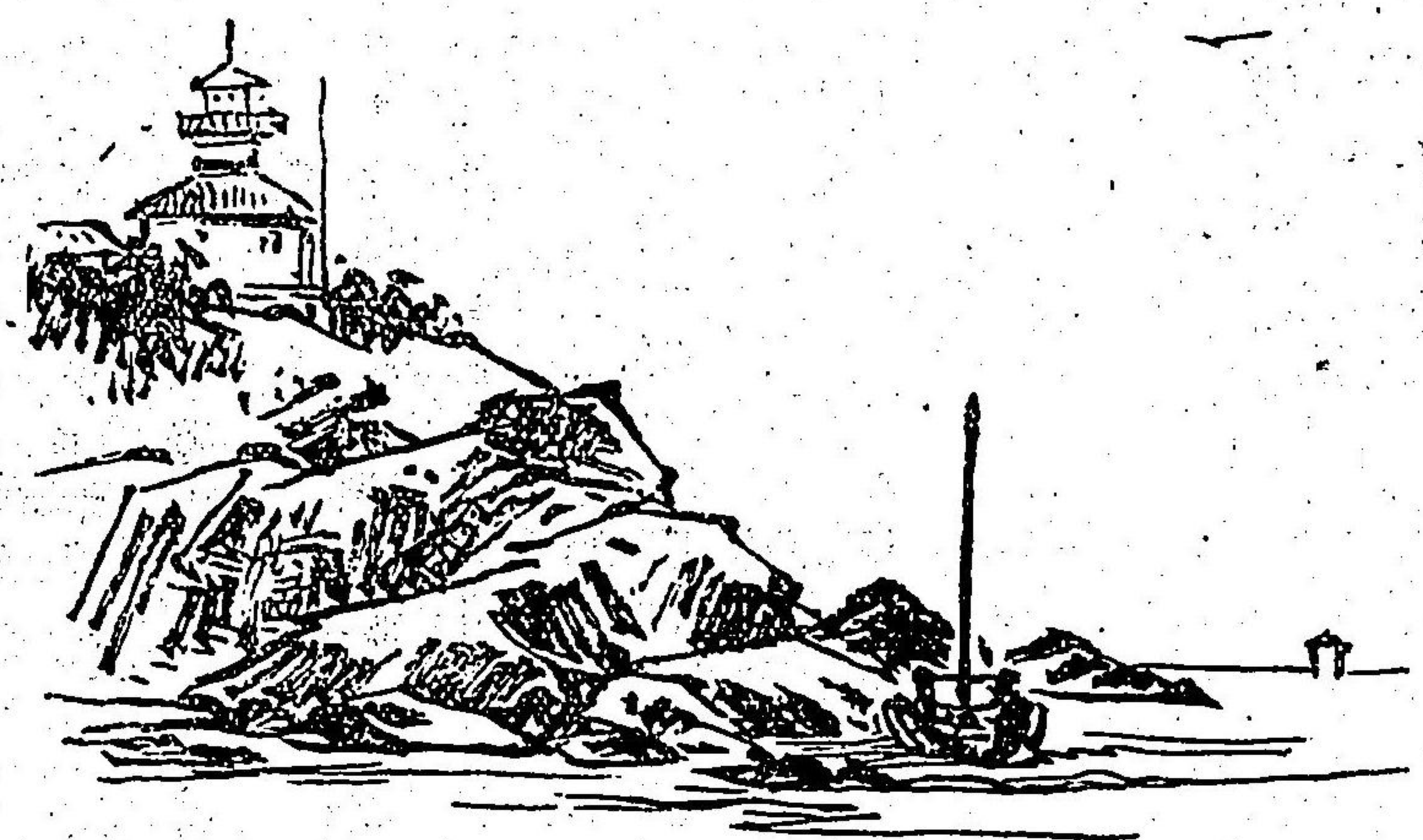
印度にて貧民を救濟せんとするは絶望と云ふべく支那の貧民は業
既に狼藉に陥り米國にては幾回か之れを救濟せんと試みたれども
其効なきのみならず却て救濟實行中に米國政府の官吏を腐敗せし
め貧民より怨望惡感情を招くに到れり獨り日本のみは貧民個々希
望を懷抱し社會的生活の興味を領するものは抑何の理が一は土地
分配法の適宜にして個々若干の土地を所有し各力作して以て自己
の衣食を供給する事是れにして一は國民を擧げて山野の美を絶愛
する事是れなり即ち相同伴を作して花を賞し單に自然の美を採ら
んとて巡禮行脚するの盛んなるは世界中復た日本人の如き國民お
るを看す既に國民自然の美を絶愛す故に居常熱々快暢復た都門に
入りて煽惑挑撥を求むるなく渾然融化して自から貧を忘るゝに到
る云々

日本風景論終

雜感

二百十九





南北二極園裡、白
 皚皚、些の變化改
 新なき處、赤道線
 畔、鬱葱葱、舉りて
 均齊、單趣なる邊
 如何ぞ造化の太
 然と悟り得んや
 之れを悟り得る
 は、唯た日本に在
 り、日本に在る哉。

明治廿七年十月廿四日印刷
 明治廿七年十月廿七日發行

(定價金五拾錢)

版權
 所有

著者兼發行者

印刷者

印刷所

志賀重昂

東京市赤坂區靈南坂町三十四番地

熊田宜遜

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

熊田活版所

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

發行所

電話番號
 千〇十四番

東京市神田區錦町三丁目一番地

政教社

15/9/37

賣捌所

東京市神田區表神保町六番地

東京堂

東京市京橋區尾張町二丁目廿六番地

東海堂

東京市京橋區彌左衛門町八番地

巖々堂

志賀重昂述

第六版 地理學講義

全壹册 定價金三十五錢 郵稅四錢



新聞雜誌批評

第壹版批評

●地理雜誌
國粹保存會雜誌と地圖し其派 (Tanaka) に其人あり知られたる志賀重昂氏に主として人類地理と專攻する如し氏南海に

航行し大に感ずる所あり南洋紀事と著し近來又本邦の生産力と論じ若々通商に貿易に政非に注意し發言せるは昔人類の地理事項ならざるはなし
今批評者の机上に横はるものは氏講義に係り序文其他の前後等も

15/9/31

賣捌所

東京市神田區表神保町六番地

東京堂

同

東京市京橋區尾張町二丁目廿六番地

東海堂

同

東京市京橋區彌左衛門町八番地

巖々堂

志賀重昂述

第六版 地理學講義

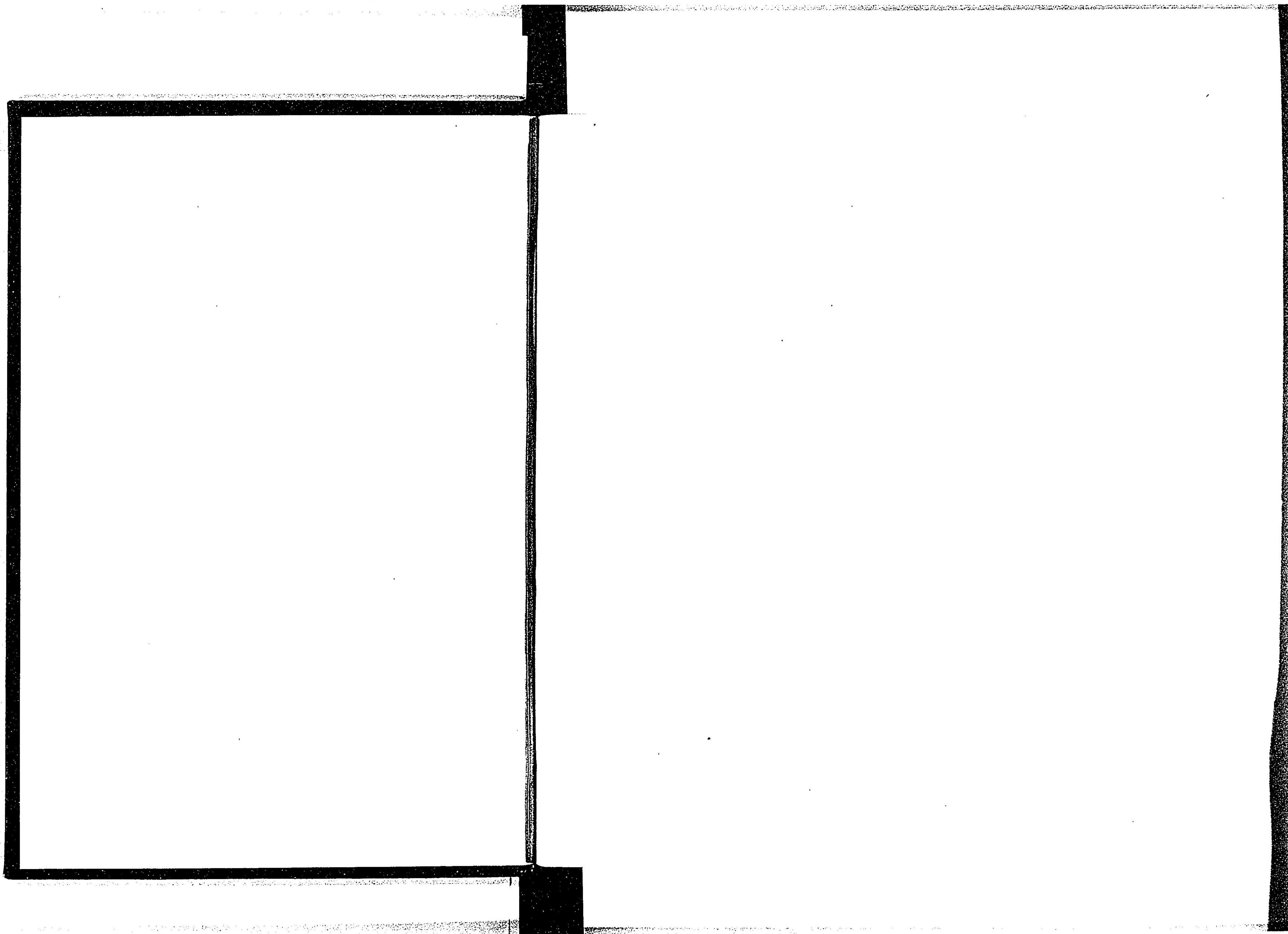
全壹册 定價金三十五錢 郵稅四錢

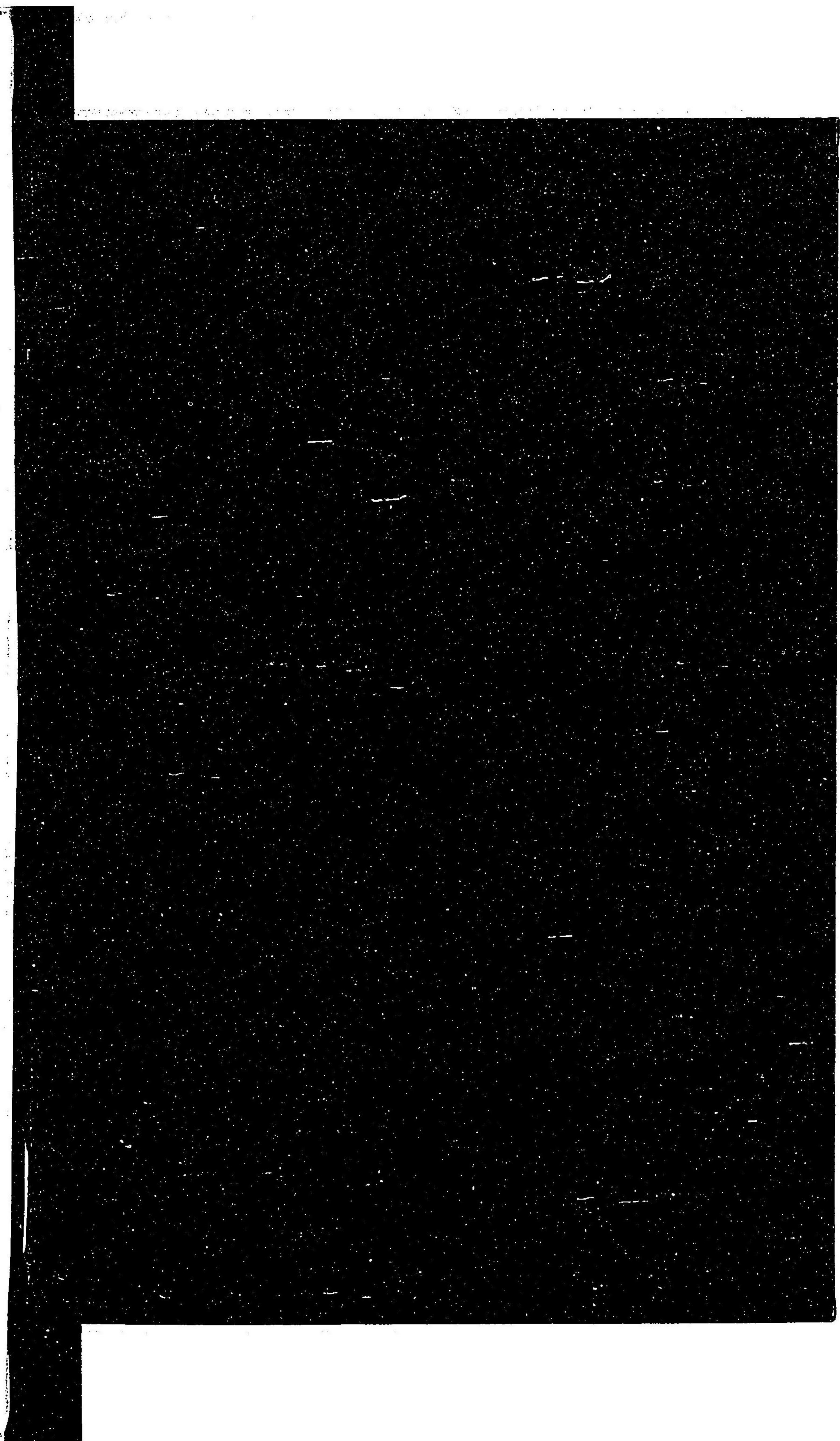


新聞雜誌批評

◎地學雜誌
國粹保存會と地圖社其派 (Tanaka Shinsui) に其人ありと知られたる
堀川忠實重昂氏に主として人類地理を專攻するもの如し其前海に

航行し大に感ずる所あり南洋紀行と著し近來又本邦の生産力と論し
若々通商に貿易に政事に注意し發言せるは昔人類の地理事項なら
ざるはなし
今批評者の机上に横ばるものは氏が講義に係り序文其他の前例等も





45
67

023039-000-7

45-67

日本風景論

志賀 重昂/著

M 2 7

ADB-1008

